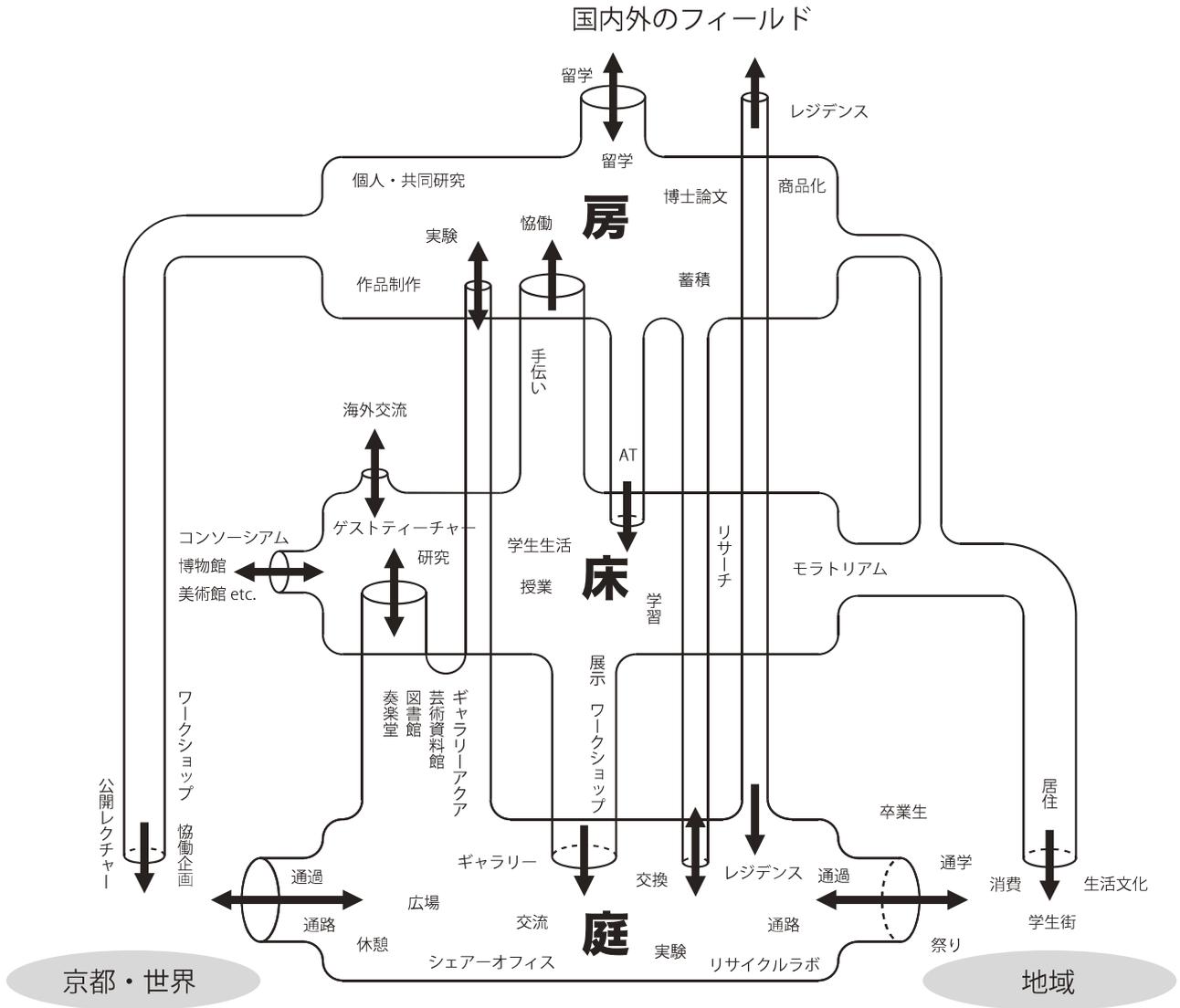


# 移転基本コンセプト



移転後の人・コトの動き

2017年1月

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

京都市立芸術大学 学長

新田清一



京都市立芸術大学は設立当初より、日本の伝統芸術を継承・刷新するとともに、日本の近現代芸術の屋台骨を支え、世界的にも高く評価されるアーティストたちを数多く世に送りだしてきた。その意味で、京都市立芸術大学は、京都市のみならず、日本の芸術文化のきわめて重要な火床の一つ、世界への発信基地の一つでありつづけてきた。

それが可能であったのは、濃密で質の高い教育環境(少人数教育)を、本学が京都市・京都市民の支えの上にこれまで維持してきたからであり、また時代に支配的な空気や価値観の外側に軸足を置き、そこから一定の距離をとった思考と表現の活動を丹念に積み重ねてきたからである。オーディナリー(「普通」や「常識」)に対するこのエクストラオーディナリーな自由の保持こそ、翻って芸術大学の京都市民に対する責任でもあると、先達たちは考えてきた。なぜなら、将来、戦争や不況や災害など、社会が苛酷ともいえる危機に陥ったときに、いつでも別の視点や考え方、つまりは「<sup>オルタナティブ</sup>対案」を提示できる準備をしておくことこそ、大学の使命であり、責任だからである。

あらためて考えるに、「文化芸術都市」を標榜する京都がこれまでそれでありえたのは、内陸型工業都市としての「ものづくり」の文化とともに、学問・芸術・宗教の重層的な厚みが全国に抜きんでてあったからである。これら三つはいずれも、日常の背後、あるいはその外側に視点をとって、そこから日々の暮らしに風穴を空けるものである。とりわけ芸術は、かじかんだり、こわばったりしかけている暮らしに潤いや膨らみをもたらすとともに、そのような深呼吸のなかで日々の暮らしの再考と吟味へと人びとを誘うものである。そういうものとして、人びとは国家よりもはるかに古い人類史的な、草の根の活動を連綿と続けてきた。京都市民は、日常の外側にあるこの深い叡智や感受性に身近な場所であたりまえのように触れることによって、あるいは日々「習い事」を通じてそれらを身につけることによって、みずからの暮らしを捉えなおし、多視点的にふり返る力を得てきた。日々の暮らしに豊かな色合いを与えてきた。京都ならではの市民生活の厚みと包容力を生みだし、継承し、未来につないできた。

そういう文化の火床としての機能を、京都市立芸術大学は、今回の崇仁地区への移転を機会に、地域住民や京都市民、地場の産業や企業と手を携えつつ、さらに大きく飛躍させんと強く願うものである。

## 移転に関する基本姿勢

### 京都市立芸術大学が果たすべき3つの役割

#### 芸術であること

日常的な価値観の外側に軸足を置き、オルタナティブな価値観を提示すること

直近のニーズに応えるのではなく、想像力をもって、50年後、100年後に世界が危機に陥ったときに、こういう生き方、社会のつくり方もあるという、対案（オルタナティブ）を示すことができるのが、芸術の責任である。それはまた伝統を創造的に継承していくなかで可能となる。

#### 大学であること

高度な研究教育とそのたえざる変革を通して、人と人・人と自然の新しいつながり方を提示し、実践すること

一般社会ではリスクがあると思われることでも、失敗を恐れずに取り組めるのが大学である。それは、新しいモノの見方や世界へのヴィジョンにつながるものでなければならない。芸術分野の次世代育成のために、実験的で創造的な研究教育の高度化を進める。

#### 地域にあること

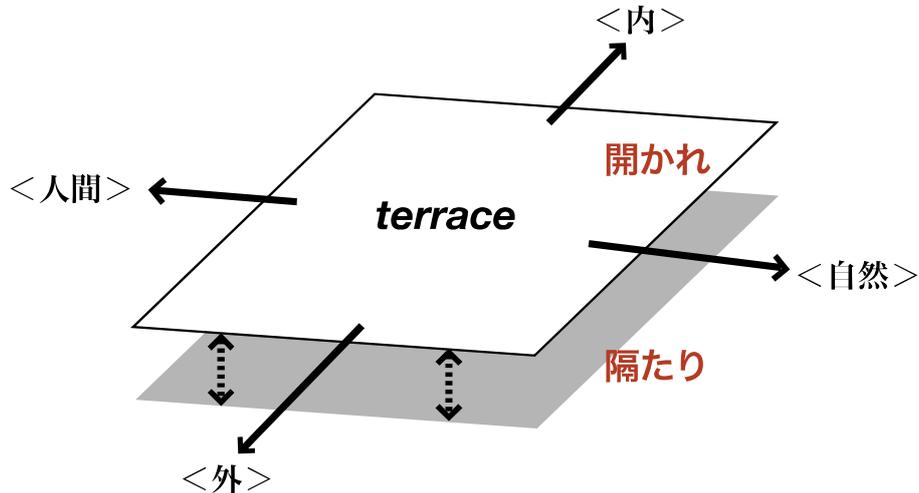
新しい住民として、地域の歴史を引き継ぎながら、新しい歴史と創造的な地域社会を共につくっていくこと

地域の歴史をふまえ、多様な文化的背景をもった人々とともに、創造性を軸に新しい生き方、働き方、コミュニケーションのあり方が共存・活性化し合う地域社会を実現していく。またそのための社会実験を行う。

## 全体コンセプト "Terrace"

## Terrace

《テラス》



(1) 《テラス》とは、内から外に張り出して、人々を誘い、人と人・人と自然の新たな出会いや交流を導く「床」であり、広がりである。

(2) 《テラス》とは、本来の地面から少し浮いて、日常の視点を変え、新たな展望を広げる共有空間である。

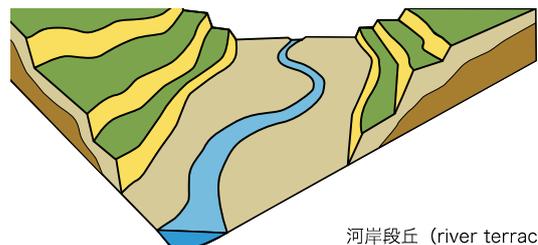
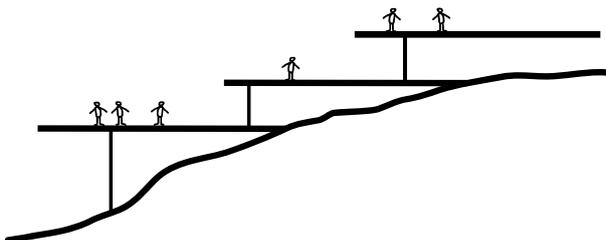
要するに《テラス》は、ある基準面から浮き隔たることによって新たな開放を生み出す、すなわち「隔たり」と「開かれ」の二つの働きを同時に実現する。

先の3つの基本姿勢をふまえ、京都市立芸術大学のキャンパス全体を《テラス》と位置づける。

## テラス terrace [英]、terrasse [仏]

古フランス語では「盛り土」を意味する。語源はラテン語の terra (土、大地、地球)

- ・ 建築におけるテラス：建物本体からの突き出し部分、屋根の上の面
- ・ 地形におけるテラス：高低差のある平坦な面。段丘、棚田など



河岸段丘 (river terrace)

## 全体コンセプト "Terrace"

《テラス》としての京都市立芸術大学は次の基本性格をもつ。

### 1. 「浮く」こと——エクストラオーディナリーな場

テラスが地上から一定程度浮いているように、時代や社会の支配的でオーディナリーな価値観から一定の距離をとり、日常的な視点を変え、新しい展望を開く「エクストラオーディナリー」な場を恒常的に形成する。そこでこそ芸術の研究と教育の自由でラディカルな展開が可能となる。

### 2. 文化芸術都市・京都の新しい文化の十字路

京都駅西エリアから京都駅・東山の文化ゾーンを結ぶ東西軸と、市民の多様な活動を内包する鴨川・高瀬川に沿った南北軸の交叉点に位置し、文字通り芸術文化の十字路として都市の新しい動線を形成する。崇仁地区の中の十字路、京都市の中の十字路、世界の中の十字路という三層のテラスにおいて、芸術文化の創造・発信・交流を展開する。

### 3. 隔たり／開かれ

テラスが地面から浮き隔たることによって新たな展望の広がりを生むように、大学は一般社会から一定程度隔たることによって研究教育の自由と学生・市民生活双方の庇護を実現するが、それと同時に可能な限り外部に開かれ、芸術文化を通じて多様な文化的背景をもった人々の創造的な交通・交流を促す場でなければならない。

## 全体コンセプト "Terrace"

Terrace としての京都芸大の地理的コンテキスト

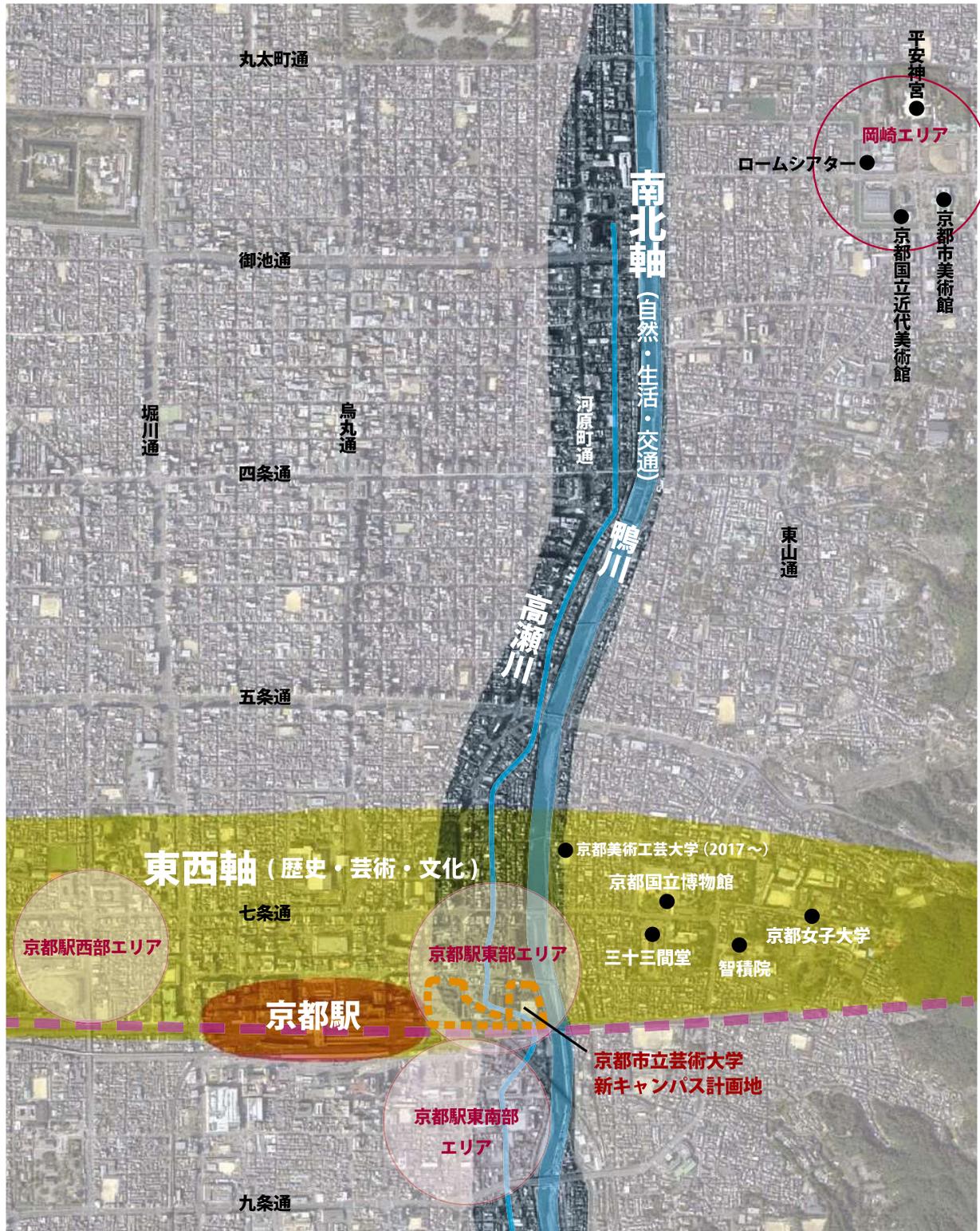


図 1

## 全体コンセプト "Terrace"

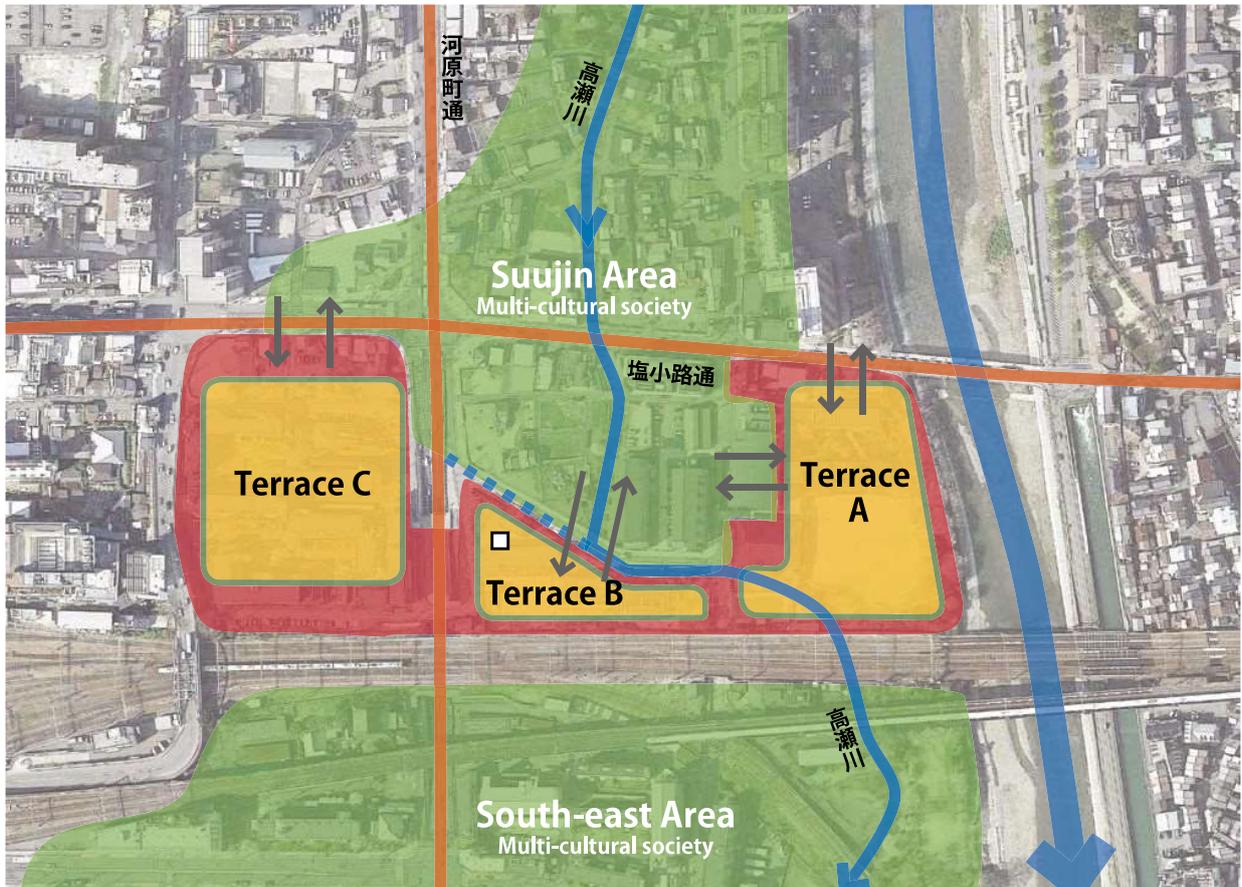
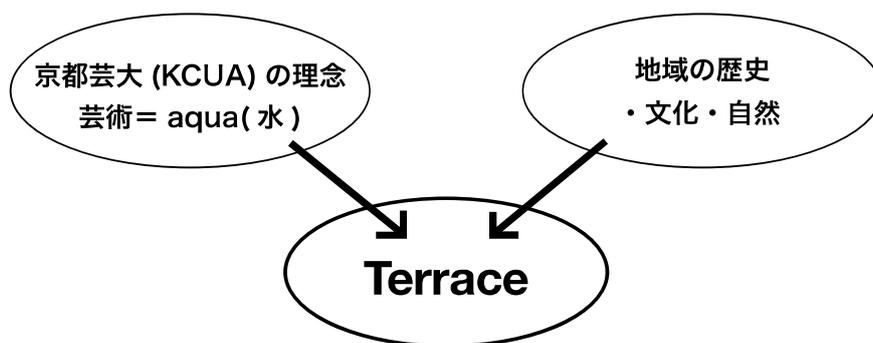


図 2

沓掛という郊外型立地から京都駅東隣という都市型の立地への移行となるが、国内外からのアクセスに恵まれたこの地域は、豊かな歴史性と多文化性という地域資源、さらに高瀬川と鴨川という豊かな水の流れ、東山のすばらしい眺望という自然環境を有している。

《テラス》というコンセプトは、この地域の歴史・文化・自然という資源と、人と社会を潤す「水（アクア）」として芸術を捉える京都芸大の理念を結びつけ、大学と地域、芸術と社会の新しい関係をめざすものである。



高瀬川の活かし方が要の一つとなる

## 全体コンセプト "Terrace"

### なぜ "Terrace" なのか？

#### [1] Terrace と芸術・歴史・自然

"terrace" は、「寺」「地球」「照らす」など、京都という地域から地球へと膨らむ多様な響きと共鳴する。また、浮遊する床としてのテラスは、「舞台」や「川床」など、聖と俗、芸術・芸能と日常をつなぐものに通じ、地域の景観・歴史・自然と深く切り結ぶ。

#### [2] Terrace と京都の新しい文化の火床

"Terrace" としての京都芸大は、京都駅西エリアから京都駅、東山の文化ゾーンを結ぶ東西の新しい文化軸を創出するとともに、川に沿って人々が行き交い、多様な催しが行われる南北軸の延長上に位置する。テラスは、この十字路において、新しい芸術文化圏が形成される火床となる。(図1)

#### [3] Terrace と水 (アクア) の流れ

"Terrace" としての京都芸大は、高瀬川と鴨川という水の流れに接し、人と社会を養う水 (アクア) として芸術を捉える理念を具体化する新しい「川床」として、人と人、人と自然の交感・交流を促し、新しい文化創造と社会へのヴィジョンを導く。(図2)

#### [4] Terrace と多文化社会

A 地区、B 地区、C 地区の3つの地区をそれぞれ "TerraceA"、"TerraceB"、"TerraceC" とし、そのアンサンブルが複合的なひとつのテラスとなって、地域の人々・京都市民・世界からの来訪者に開かれ、多文化的な相互交流と創造的な社会実験を促す場となる。(図2)

#### [5] Terrace の隔たり／開かれ

テラスは地面から浮き隔たることによって新たな展望を生む。テラスのもつ「隔たり」と「開かれ」の両面性は、芸術の自由な研究教育と学生・市民生活双方の庇護、および大学と地域社会の開かれた交通・交流という二重の目的をもつ芸術大学のあり方のモデルとなる。それは専門性と横断性を同時に探求する京都芸大の研究教育のモデルともなる。

## "Terrace"としてのキャンパス計画のポリシー

### 1. 更新可能性をもち、未来に開かれた可塑的キャンパス

郊外型から都市型の立地となるが、現在のキャンパスで実現されている「創造のための余白」すなわち「創作研究に必要な環境を自ら工夫できる可能性」を今後とも保持すること。芸術大学は、文化の享受者・消費者のための一般の文化施設とは根本的に異なる文化の生産者・発信者育成の場である。与えられた環境に閉ざされることなく、自ら環境を変え、つくる可能性がそうした場には不可欠である。テクノロジーの発展や社会変化に伴う芸術の制作・発表の環境の変化に柔軟に対応するためにも、研究教育環境の更新可能性を保持すること。それは未来に対する《テラス》の構造的な「開かれ」である。

### 2. 地域の歴史・自然との生きたつながり

歴史や自然との生きた関係なくして芸術はない。そのためにも《テラス》としての新キャンパスには、高瀬川をはじめとした地域の景観や歴史・記憶が消されることなく多様なレベルで埋込まれる。今後ますます重要となる人と自然の新しい関係を芸術の研究教育を通して探求するためにも、キャンパス全体において、環境との有機的なつながり、自然エネルギーや自然素材の積極的な活用をはかる。それはランニングコストを含めた創造的な低コスト化にも通じ、人々の多様な創造活動を促す。そのことを通じて、《テラス》全体が人間の創造性についてのひとつのメッセージとなる。

### 3. 大学と地域社会、および芸術内・外の異なる領域間に創造的な関係性を生み出すこと

セキュリティや遮音性、専門性の高い研究教育のためには、一般の社会空間からの一定の「隔たり」は必要であるが、大学を自足した閉じた組織としてでなく、周囲にある駅、ホテル、ホール、食堂、工房、公園などさまざまな機能をもった社会資本とつながった生きた組織と捉え、最大限の可視性・交通可能性を保障すること。それは大学と地域社会の新しい関係性を開く。《テラス》の「隔たり」と「開かれ」の両面性は、キャンパス内部においても実現され、諸領域相互の独立と、外部を含めた多様で自由な交流への開かれが同時に実現されねばならない。それを通じて京都芸大は創造的な社会実験のテラス＝火床となる。

# "Terrace" のイメージ

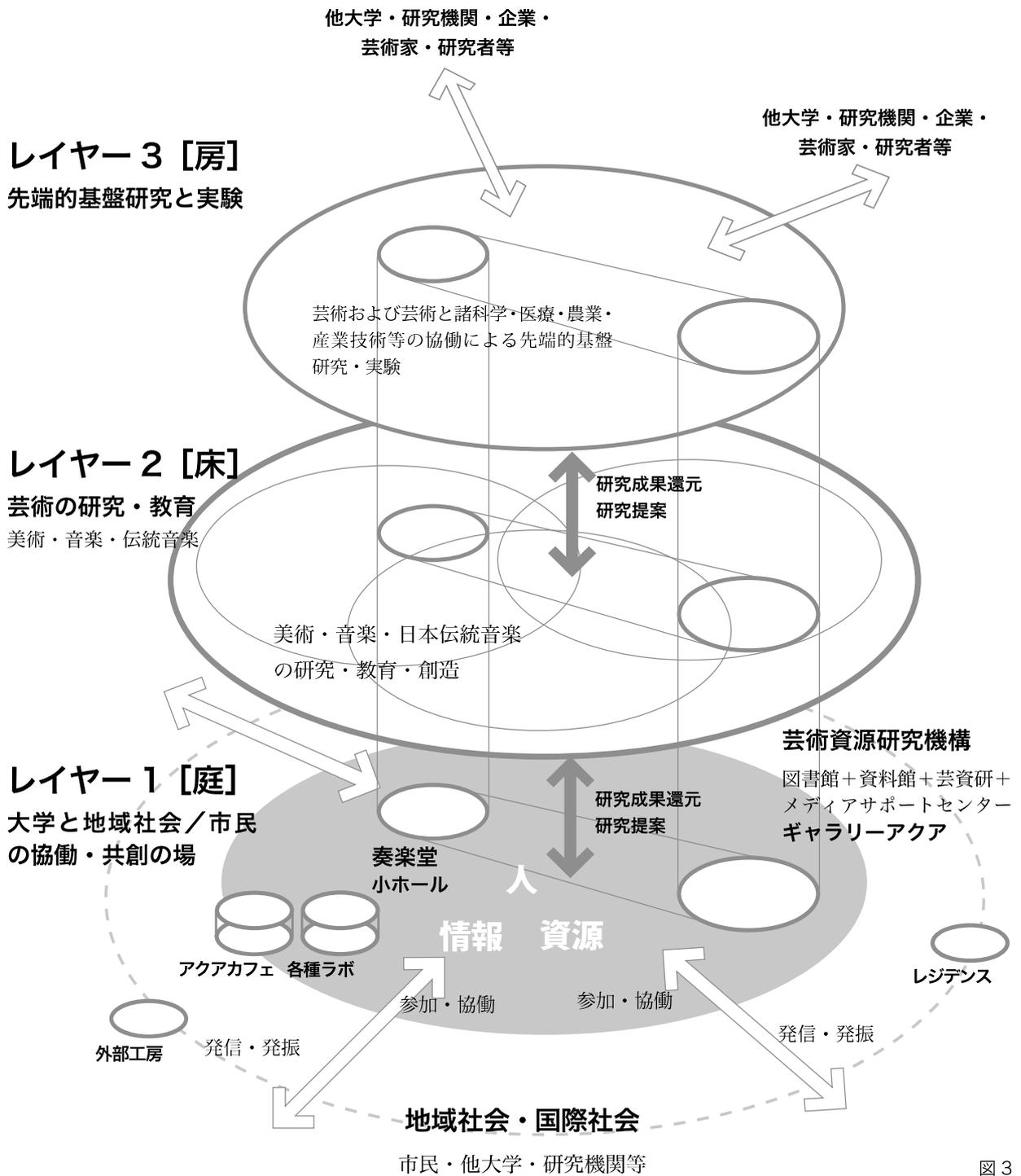


図 3

美術・音楽・伝統音楽研究という京都芸大の三領域のさまざまなレベルの研究・教育活動を、テラスというコンセプトモデルに当てはめ、内外の機能的相互関係を示したもの。

## "Terrace" のイメージ

---

<b>T</b>	TRAVERSE	横断
----------	----------	----

---

---

<b>E</b>	ENGINE	火床
----------	--------	----

---

---

<b>R</b>	RING	環
----------	------	---

---

---

<b>R</b>	RARE	稀 (またとない)
----------	------	-----------

---

---

<b>A</b>	ASSOCIATION	自由結社
----------	-------------	------

---

---

<b>C</b>	CROSSROADS	十字路
----------	------------	-----

---

---

<b>E</b>	EXPERIMENT	実験
----------	------------	----

---